

道徳教育（小・中向）

平成 26 年度委嘱 道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業

地域に根ざした創意工夫ある ESD 活動と道徳教育の連携

―道徳的心情の高まりが生み出す ESD 活動―

あま市立甚目寺小学校

1 はじめに

本校はあま市東部に位置し、名古屋市西部と隣接している。昔ながらの町と新興住宅が混在しており、人口が増えている地域である。学校の東隣には、尾張四観音の一つである甚目寺観音があり、町中であって、落ち着いた緑に恵まれた環境の中に学校がある。

本校は「善く生きる子」を校訓として掲げ、平成 22 年度から ESD の考えを取り入れた教育活動を行っている。ESD とは、「持続可能な発展のための教育」と訳され、「持続可能な社会の担い手を育む教育」と言える。ESD によって、今まで以上に人や地域に積極的にかかわろう、伝えよう、つながろうとする姿勢を育むことによって、自分たちのふるさとである甚目寺を大切にしようとする思いを高めてきた。

その結果、全校児童を対象とした 25 年度末の ESD 事後アンケートでは、「甚目寺をすばらしい町、よい町だと思いますか」「甚目寺を自分の『ふるさと』として、大切にしたいと思いますか」の質問には、約 7 割の児童が「そう思う」と答え、一定の成果が得られた。一方、「甚目寺の現在や未来のために何か考えたり、行動したりしたいと思いますか」という質問には、3 割強の児童が「そう思う」と答えたのみであった。子どもたちは様々な取組を行い、ふるさとを大切に思うようになってきたが、自発的に行動に移そうとするまでの気持ちには十分至っておらず、ふるさとを心から思う気持ちの伴った取組とは言い難いという問題点が見えてきた。

そこで、26 年度は行動面に重点をおきがちであった取組を見直し、情意面と行動面の両面から見て、取組を考えていくことにした。つまり、ESD の取組を行う中で、要所に道徳の時間を設け、ESD と道徳の連携を強化する。そして、道徳の時間では思いやりや郷土愛をテーマとした題材を中心に扱い、ESD に必要な情意面を育てることにした。このように、情意面と行動面を計画的に育てることで、地域の持続発展と将来の地域の担い手となる子どもの育成を図っていきたいと願い、本研究を進めることとした。

2 研究仮説と手立て

（１）研究仮説

地域やそこに生活する人々の思いについて考え、ESD の活動と道徳の時間の連携を図るならば、道徳的心情の高まりや、道徳的实践力が育つであろう。

（２）手立て

ア 地域やそこに生活する人々の思いについて考えるための授業作りの手立て

外部講師を招いて、思いやりや郷土愛を中心に据えた道徳的心情の高まりを促す教職員の勉強会を開く。

イ ESD 活動と道徳の時間の連携についての手立て

(ア) ESD カレンダー (ESD の取組が、生活科や総合的な学習の時間を中心に、他の教科、特別活動等と関連していることが分かる月別に示したチャート図) の中に道徳を位置づけ、道徳と ESD の取組の連携を強化する。

(イ) 思いやりや郷土愛を中心に据えた道徳授業の実践と ESD 活動の展開

ウ 道徳の授業と並行しての ESD 活動実践の展開

(ア) 地域の人々の人材活用による地域を知る活動

(イ) 地域で学んだことを発信する活動

(ウ) 地域に貢献するための具体的な行動

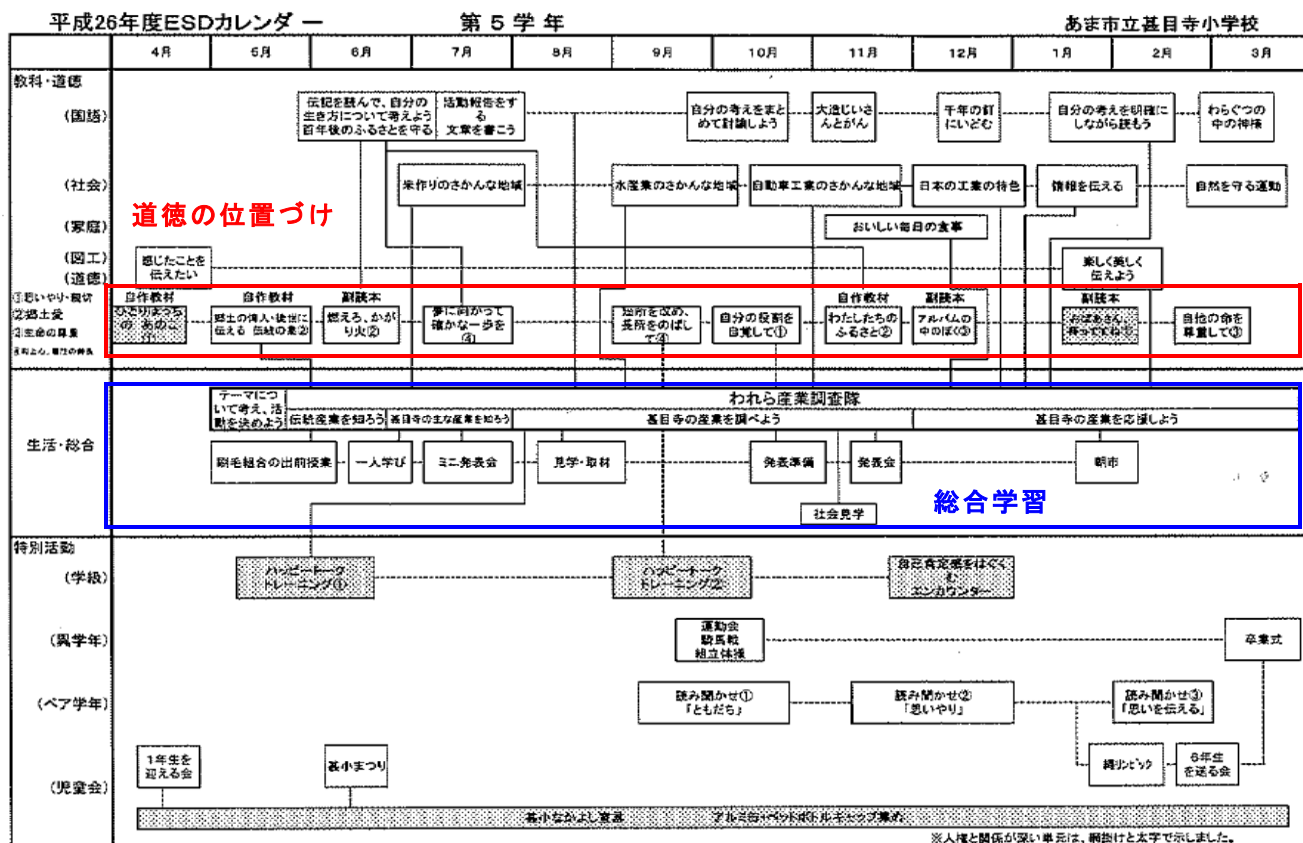
3 研究の実践と考察

(1) 教職員の勉強会

研究の基本となる考えについて講師の先生を招いて学習会を開くことで、全職員で共通理解を図った。小牧市立小牧中学校長の玉置崇先生、愛知教育大学教授の鈴木健二先生、愛知淑徳大学非常勤講師の柴田八重子先生を招き、授業をする上で大切なこと、道徳の指導の時間で大切にすること、道徳の資料の取り上げ方などを学んだ。また、関西大学総合情報学部教授の黒上晴夫先生を招いて、シンキングツールについて学んだ。さらに、愛知教育大学の土屋武志先生や名古屋女子大学講師の鈴木公司先生からは、話し合いや学び合いによる学力の向上について、見識を深めた。

これらは、後日内容をレポートにまとめ、全職員に配付し振り返りが出来るようにした。また、学校 HP にも載せて教員の学習の様子を広く公開した。

(2) ESD カレンダーの見直し



本年度は、道徳による情意面の強化を重視した。そのため、昨年度までの ESD カレンダーを見直し、ESD の取組に対して、その時々に必要な情意面の成長を補う道徳の自作教材の選定や副読本の活用などを盛り込んだ。

特別支援学級を含む全学年が、ESD カレンダーの見直しを行った。

(3) ESD と道徳の連携事例 (5 年生)

5 年生は、地域の産業を教材として ESD 活動に取り組んでいる。甚目寺の産業には、100 年以上前から行われている日本一の生産を誇る「刷毛作り」がある。この「刷毛作り」を教材として取り上げ、道徳との連携を図りながら ESD 活動を展開した。

ア 実践の流れ

(ア) 道徳授業「ひとりぼっちのあの子」の実践 4 月

学級での仲間作りのために宮沢章二氏の詩と書籍「行為の意味 青春前期のきみたちに」の中の詩を用いて、「思いやり」の意味について考えさせた。

(イ) 総合的な学習の時間「刷毛の出前授業」 5 月

刷毛組合の方 3 名を招き、刷毛の歴史や作り方、直面する課題などの話を学年全員で聞いた。授業後、「初め、刷毛だと聞いて『微妙…』と思ったけど、話を聞いたら歴史があって、すごいものなんだと分かった」「刷毛を作っている人が少ないと聞いて、手伝わなければと思った」など刷毛について興味をもつことができた。

(ウ) 道徳授業「後世に伝える伝統の技」 6 月

出前授業をうけた形で刷毛作りの「人の思い」に迫る道徳を行った。創始者、山崎政三郎さんのふるさと甚目寺に貢献できた喜びが書かれた資料や刷毛組合の方の刷毛作りに対する今とこれからの熱い思いをビデオレターで語ってもらい、児童は作り手の心に触れることができた。

(エ) 総合的な学習の時間「甚目寺の産業を調べるにあたって」 6 月～7 月

これから 11 月までの間で、グループに分かれて甚目寺の農業、商業、工業について調べ学習をしていく上で、まずは手元にある資料を使い、これから調査する産業を調べ、各クラスでミニ発表会を行った。発表会では、シンキングツールの一つである X チャートを使い、調べた内容を「仕事内容」「歴史」「誇れること」「人の思い」の 4 つの項目に分類して発表させた。そこで気づいたことは、「人の思い」が調べられていないことだった。道徳授業やビデオレター等で知っていた刷毛作り以外は、ほとんど調べられていないことが分かった。そこで、夏休み以降に取材活動を行い、「人の思い」を中心に調べてくることとなった。道徳で学んだ「人の思い」の大切さや X チャートで気づいた「資料では『人の思い』に迫ることは出来ない」という事実によって、児童の調べたいという思いに火がつき、取材活動へと向かう意欲が高まった。



【X チャートで分類】



【X チャートを見ながら発表】



【夏休みの取材活動】

(4) 道徳の授業実践事例

学校公開日に、1年に一度保護者や地域の方、関係諸機関に道徳の授業を一斉に公開している。平成26年度は、10月16日(木)に愛知県道徳教育推進会議委員等の視察があり、全クラス道徳の公開授業を行った。ESDとの連携を重視して、「思いやり・親切」以外にも「郷土愛」「生命尊重」「個性の伸長」の4項目を選んで公開した。また、授業の視点として以下の3点を設定した。

- ・ 主として総合的な学習の時間や生活科との連携を図った授業
- ・ 目的に応じたシンキングツールを使った授業
- ・ 今までに培ってきた人権教育や本年度の研修を生かした授業

ア 授業例 第4学年3組 「ヒキガエルとロバ」 3-(1) 生命の尊重

(ア) 本時のねらい

- ① 命の尊さに気づき、動物の生命を大切にしようとする気持ちを高める。
- ② 話し合い活動において、自分の考えを友達に進んで話したり、友達の考えを認めたりして、思いやりの気持ちを高める。

(イ) 実際の授業

資料を読み、アドルフとピエールの行動を考え、よいと思うところ、悪いと思うところを児童に発表させた。その発言をPMT(よいと思うところ、悪いと思うところ、振り返り)分析表を利用して、板書した。PMT分析表を使うことで、何をよいと思っているのか、何を悪いと思っているのかというクラス全体の傾向をつかむことができた。自己の道徳的価値の内省を促すのに、有効な手段だった。



【B紙に表されたPMT分析表】



【ドラえもんを教材に使った道徳】



【環境を扱った道徳】



【Xチャートを使った道徳】



【福祉を扱った道徳・同心円チャート】



【人権教材の道徳】

(5) 総合学習発表会(地域で学んだことを発信する活動)

11月21日(金)には、総合学習発表会を行った。本校のESD活動を保護者や地域の人に知ってもらう場として位置づけている。1年生の場合、来年度入学する園児を招待して、自分たちが作ったおもちゃを使って遊ぶことで、最初のつながりの場としている。2年生以上は、取材や出前授業でお世話になった人を招き、学んだことを発表して見てもらうことで、つながりの場としている。係わった方との交流を深めることは、子どもたちと地域

がつながり、地域愛を育む大切な場である。



【園児と交流する1年生】



【グループ発表：4年生】



【発表の様子：6年生】

(6) 地域に貢献するための具体的な行動（道徳的実践力の育成）

お世話になった方々へのお礼や学んだことを実践する場として、各学年何をするのか子どもたちが話し合い、毎年工夫を凝らした取組を行っている。

ア 2年生

町探検でお世話になった商店街の方に、生活科で育てたさつまいものツルや秋に採れるドングリの実、松ぼっくりなどを使ってリースを作り、クリスマスプレゼントとして、お礼の手紙を添えて渡した。一生懸命心を込めて作ったリースや書いた手紙を喜んで受け取っていただけたので、安心したようだった。後で感想を聞いたとき、「喜んでもらえてよかった」「早く飾ってもらいたい」などと自分たちが地域のために活動することができた喜びを感じている様子が伺えた。



【お礼をする2年生】

イ 3年生

福祉について学んだ3年生は、2学期に学校近くのデイサービスセンター「銀羊苑」に出向いて、クラスごとでそこを利用している方々とのふれあいの機会を設けた。どんな内容にするかは、毎年話し合いで決めている。

今年は、リコーダーや手話ソング、民謡踊りを発表し、国語科「学校行事をしようかいしよう」と関連して、おじいちゃんやおばあちゃんに甚目寺小学校のことを紹介した。交流の時間では握手をしたり、手遊びをしたり、折り紙で一緒に遊んだり、おじいちゃんやおばあちゃんのお話を聞いたり、とてもあたたかい雰囲気の中、子どもたちもおじいちゃん、おばあちゃんも笑顔いっぱいだった。帰りは惜しくて別れがたいほど、子どもたちにとって、とても貴重な体験となった。



【全員でリコーダーを披露】



【お話をしっかり聞きます】



【すっかり仲良くなりました】

ウ 6年生

甚目寺の歴史や文化を学んだ6年生は、学んだことを生かして何か地域のためにできることはないかを考えた。ウェビングマップやKJ法の手法を活用して、たくさんのア

アイデアを出し合った。身近なこととして、地域清掃が取り上げられ、実行に移すこととなった。マラソン大会の前日には、コースとなっている校外を歩いてまわり、地域清掃を行った。また、2月3日の甚目寺観音節分会に向けて、甚目寺観音境内や本堂をきれいに掃除することとなった。節分会当日は、6年生がオープニングを飾って豆をまかせてもらい、節分に参加することができた。このような活動の中で、地域の歴史の深さや価値を実感し、「ふるさと甚目寺」を大切に思う気持ちがより深まったのではないかと考える。



【節分会に参加】

4 研究の評価

(1) 研究の成果

ア アンケートから見る道徳的心情の高まりについて（2月実施）

アンケートを3種類とった。最初二つは、「甚目寺をすばらしい町、よい町だと思いますか」（全校児童調査）と「甚目寺を自分の『ふるさと』として大切にしたいと思いますか」（全校児童調査）である。昨年2月の調査では、「思う」と答えた児童が、66.5%と69.7%と高かった。今年は、二つのアンケートとも、70.3%と74.6%とさらに増加した。

三つ目の「甚目寺の現在や未来のために、何か考えたり、行動したいと思いますか」（3年～6年児童調査）は、昨年は「思う」と答えた児童がわずか34.8%と大変低かった。そのため、情意面を育てる取組を行い改善を図った結果、今年は42.8%と8%増加した。8%に有意差はないかもしれないが、プラス方向に動いていることは評価できる。道徳との連携は取り組み始めてまだ1年目である。これからも着実にESDの活動と道徳の時間の連携を図っていくならば、さらなる向上が期待できるはずである。

イ 道徳的实践力を気持ちの面で支えたシンキングツールを用いた話し合い活動

話し合いにおいてシンキングツールを用いたことにより、さまざまな意見を視覚的に見やすく分類できた。そのため、自分たちが取るべき行動に対して納得する子が多く、それが意欲的な実践態度に結びついた。例えば5年生の実践では、「人の思い」が十分調べられていないことがXチャートから確かめられたため、次の課題を「人の思い」と位置づけた取材活動が主体的に行われた。6年生では、ウェビングマップやKJ法の手法を活用してたくさんのアイデアを出し合い、地域貢献についての方法を話し合い、地域清掃を行うという共通理解が得られた。

(2) 今後の課題と取組

道徳とESDの活動を連携していくための有効な手立てとしては、道徳の自作教材開発が挙げられる。ただし道徳の自作教材は、作るのに時間がかかるため、今後も学年ごとに年につか二つずつ増やしていきたい。また、普段目に触れる新聞記事やテレビ、旅先で目にした物など、道徳の教材に発展するような素材集めを教職員が協力して行い、楽しみながら道徳に関わる雰囲気を作していきたい。

今後も道徳の授業の充実とESDの活動との連携を図りながら、道徳的心情と道徳的实践力の高揚をめざし、学校教育目標「善く生きる子」の具現化に努めたい。